

2017 年度国際文化学部卒業論文

## 鄭蘋如

—二つの祖国の狭間に生きた女性の真実—

所属学部 法政大学国際文化学部  
指導教員 鈴木靖（言語文化演習）  
学籍番号 13G0713  
氏 名 椎原 理奈

## 目次

第一章	序論	2
第二章	資料と先行研究	3
第三章	鄭蘋如の略歴	5
第四章	鄭蘋如とはどのような人物か	
	(1) なぜ抗日運動に身を投じ、どのようにして諜報員になったのか	8
	(2) 諜報員としてどのように日本人と関わっていたのか	12
	(3) なぜ処刑されたのか	17
第五章	鄭蘋如の死	21
第六章	その後の鄭家	24
第七章	静芝の想い	27
	参考文献・資料	28

## 第一章：序論

2009年6月7日、上海郊外の墓園である銅像の除幕式が行われた。銅像のモチーフとなった女性の名は鄭蘋如（てん ぴんる一、Zheng Pingru）。日中戦争時代の1938年から約2年という短い間、上海で蒋介石国民党の特務工作機関の諜報員として活躍し、26歳の若さで日本の傀儡政権であった汪兆銘政府によって処刑された人物である。鄭蘋如が生きた1930年代の上海は列強諸国が次々と租界と呼ばれる居住地を形成し、異国情緒が溢れる都市として「東洋のパリ」や「魔都」とも称されるほど反映していた。忽然として現れた最先端の西洋とそうした列強諸国に虐げられる現地中国人たちの暮らしの裏には、阿片窟や中国人マフィア組織、複雑な国際情勢を反映して各国の諜報機関やテロリストが暗躍するという混沌の極みが存在していた。まさに光と影が同居し、国家や人間の欲望がむき出しにされた街であった。1937年に日中戦争が開戦すると、上海の街にはそれまで以上の混沌と混沌がもたらされ、多くの特務工作機関の人間が闇を抱え込んだまま歴史の狭間に消えていった。それまでは鄭蘋如もそうして消えていった大勢の一人であった。

そんな彼女を一躍有名にしたのは2008年に公開された映画「ラスト・コーション」である。中国人女流作家、張愛玲の短編小説「色・戒」を原作として作られたこの作品は、第二次世界大戦中の上海を舞台に抗日組織に属する美人女スパイと暗殺対象である汪兆銘政権の高官との恋愛を描いた作品で、そのストーリーと過激な性描写が話題となり数々の映画賞を受賞した。この主人公の女スパイのモデルとなったのが鄭蘋如なのである。

こうしたメディアの印象から、鄭蘋如は抗日烈士やハニートラップを仕掛ける女スパイという派手なパブリックイメージを持たれるようになった。現に中国で放送された鄭蘋如を紹介するテレビ番組のタイトルには必ずと言ってよいほど「抗日」の二文字が含まれ、愛国教育の一コンテンツとして利用されている。死後70年近くたってから彼女の銅像が建てられることになったのもそうした背景があったに違いないし、その証拠に除幕式の看板には「抗日英雄」の文字が書かれていた。また、美人女スパイというキーワードは人々の想像を掻き立てるらしく、彼女はこれまでに「ラスト・コーション」以外にも様々な創作物のモデルになっている。

しかしながら、中国やメディアが作り上げる鄭蘋如の姿には虚構が入り混じり、その裏には語られていない多くの事実がある。その一つが鄭蘋如の出自である。鄭蘋如は中国人の父と日本人の母を持つ、日本生まれの女性なのである。後に上海に渡った彼女が抗日運動に参加し、蒋介石国民党の諜報員として活動したのは紛れもない事実である。ただし、彼女が持つ日本という国のルーツはないがしろにできるものではなく、単なる抗日英雄、抗日烈士として扱うことはできない。パブリックイメージの裏に隠された彼女の人生を辿り、鄭蘋如とはどのような人物であったのかを考えたい。

## 第二章：先行研究

本研究では主に次のような資料を利用した。

はじめに鄭蘋如を知る基本資料として、彼女を取り上げた人物評伝及びテレビ番組がある。

- (1) 柳沢隆行著『美貌のスパイ 鄭蘋如—ふたつの祖国に引き裂かれた家族の悲劇』(光人社、2010年)

本著では鄭蘋如の両親の出会いから鄭蘋如の諜報員としての活動、丁黙邨暗殺未遂事件、処刑までが当時の日中の情勢と合わせて仔細に述べられている。また、大きな特徴としてそれまで中国側の研究ではあまり言及されていなかった母・木村はなに焦点をあて、その出自や鄭蘋如処刑後の生活についても研究がなされている。

- (2) 高橋信也著『魔都上海に生きた女間諜 鄭蘋如の伝説 1914～1940』(平凡社新書、2011年)

本著は鄭蘋如の人生の中でも大きな出来事である小野寺機関での工作活動および丁黙邨との関係に重点を置いて執筆されている。著者がこの本を執筆中に柳沢隆行氏の『美貌のスパイ 鄭蘋如—ふたつの祖国に引き裂かれた家族の悲劇』が刊行されたことから、この本では上記の本が参考文献に入っている。

- (3) 読売テレビ『日中戦争秘話 「ふたつの祖国をもつ女諜報員～鄭蘋如の真実～」』(2008年8月24日放送)

本番組は読売テレビ開局 50 年記念番組として制作されたものであり、鄭蘋如とその一家の軌跡を再現ドラマを交えて紹介している。東京のみならず、上海で一家が暮らしていた万宜坊等でも取材を行っており、妹の静芝へもインタビューもなされている。

- (4) 日本テレビ『女たちの中国 第二弾』(2008年7月21日放送)

本番組は日本テレビ開局 55 年記念特別番組として中国をテーマに制作された番組である。第二弾では李香蘭、川島芳子、愛新覺羅浩と共に鄭蘋如も紹介されている。番組内では鄭蘋如の甥にあたる鄭国基によって彼女の幼少期のことが証言されている。

次に、1916年から1940年にかけて上海で鄭蘋如と何らかの関りがあった人物たちが彼女について言及した著書には次のようなものがある。

- (5) 松崎啓次著『上海人文記』(高山書院、1941年)

本著は東宝の映画プロデューサーであった著者が1938年から1940年の上海滞在中の印象的なできごとをメモで残し、それを手記としてまとめあげたものである。これは鄭蘋如について記述された最も古い文献で、鄭蘋如は戴志華という仮名で登場

する。第一章一節に「戴志華の銃殺」というタイトルで当時上海のラジオ局でアナウンサーをしていた鄭蘋如との出会いから彼女の処刑を耳にしたいきさつまでが述べられている。なお、本稿では 2002 年に大空社から出版された復刻版を利用した。

- (6) 東京大学教養学部 木戸日記研究会『林秀澄氏談話速記録Ⅲ』(日本近代史料研究会、1977 年)

元上海憲兵隊特高課長林秀澄へのインタビュー記録。林秀澄氏が鄭蘋如による丁黙邨暗殺未遂事件直後に丁黙邨に対して行った事情聴取、鄭蘋如の処置に対しての指示、また処刑に立ち会った経緯が記録されている。

- (7) 花野吉平著『歴史の証言—満州に生きて』(龍溪書舎、1979 年)

元中支派遣軍特務部思想第一班の花野吉平の自伝。花野氏は当時陸軍に所属していたながらも反軍、和平派であった。鄭蘋如と最も親しい日本人であり、丁黙邨は戦後の漢奸裁判の中で花野のことを鄭蘋如の「親友」と発言している。また、鄭蘋如亡き後も鄭家との関係は続いており、弟である南陽氏と中国で再会している。本書では鄭蘋如から機密情報をもらっていたとの記述をしている。

- (8) 犬養健著『揚子江は今も流れている』(文芸春秋新社、1960 年)

著者は犬養毅元首相の三男で当時の国会議員である。上海では陸軍の影佐禎昭大佐を長とする汪兆銘政権樹立工作に参加。本著では鄭蘋如による丁黙邨暗殺未遂事件に触れているが、元上海憲兵隊特高課長・林秀澄により「(本の内容は)嘘八百である」と批判されている。

- (9) 益井康一著『漢奸裁判史』(みすず書房、1977 年)

著者は 1945 年まで、中国で毎日新聞社特派員として取材をしていた記者である。汪兆銘国民政府の関係者、陳公博、周佛海、陳璧君他に対する、蒋介石国民政府および共産党政府による、日中戦争後の裁判の記録で、丁黙邨暗殺未遂事件の裁判記録も詳細に残されている。

- (10) 晴気慶胤著『上海テロ工作 76 号』(毎日新聞社、1980 年)

著者は元日本陸軍の中国専門家で日中戦争時には汪兆銘政権樹立工作を行った影佐大佐率いる影佐機関の一員として活動している。また、国民党の諜報機関 CC 団を追われた丁黙邨と李士群が日本軍に提案したジェスフィールド 76 の立ち上げの実務を担当した。本著では鄭蘋如による丁黙邨暗殺未遂事件時について触れられているが、著者自身は当時上海を離れており、記述の内容は正確ではないと考えられている。

最後に、中国語資料には以下のものがある。

- (11) 鄭静芝口述・楊瑩整理『鄭蘋如妹妹述説家史(2009)』(天涯 2010 年第 2 期)

女流作家である楊瑩氏が行った鄭家の三女であり鄭蘋如の妹である静芝へのインタビューをまとめたもの。妹の視点から家庭や姉・鄭蘋如の姿を語っており、鄭蘋如

の交友関係や家庭教育を知ることができる。

(1 2) 許洪新『真实的鄭蘋如 (中)』(檔案春秋 2008 年第 5 期)

これは鄭蘋如についての書籍を出版している歴史研究家の許洪新が上海市档案局発行の雑誌「檔案春秋 (Memories and Archives)」に寄稿したものである。記事の中では鄭蘋如に近い日本人花野吉平との関係や丁黙邨暗殺未遂事件についての記述がなされている。

(1 3) 中国中央電視台『人物 秘密战线中的女性』

中国中央電視台によって作成されたドキュメンタリー番組で鄭蘋如が取り上げられたものである。鄭国基へのインタビューもおこなわれており、鄭蘋如の母・はなを「尊敬に値する日本人」と紹介している。

### 第三章：鄭蘋如の略歴

1940年2月、26歳の若さでこの世を去った鄭蘋如は日本と中国、二つの国の政治に翻弄され、その狭間に生きた女性であった。本章では彼女の人生を辿り、主な出来事について考えてみたい。

鄭蘋如は1914年5月14日、東京市牛込区早稲田鶴巻町（現、東京都新宿区早稲田鶴巻町）に中国人の鄭鉞（てい えつ、Zheng Yue）と日本人の木村はな夫婦の次女として生まれる。父は1906年に28歳で浙江省から来日した清国官費留学生である。彼は岩倉鉄道学校に通ったのち、法政大学専門部法律科に進学し、勉強の傍ら孫文の主宰する「中国革命同盟会」という中国人組織に参加するようになる。そこで出会ったのが、中国革命同盟会の本部があった東京都牛込区（現新宿区）東五軒町20番地の下宿屋林館で働いていた、茨城県真壁出身の木村はなである。鄭蘋如が生まれたとき、父は36歳、母は28歳で二人の間には1912年に誕生した長女・真如（しんにょ、Zhenru）がいた。2年後の1916年秋、法政大学を卒業した鄭鉞は日本人の妻と幼い二人の娘を連れ、母国中国へ帰国する。一家が向かった先は「東洋のパリ」とも呼ばれた上海であった。

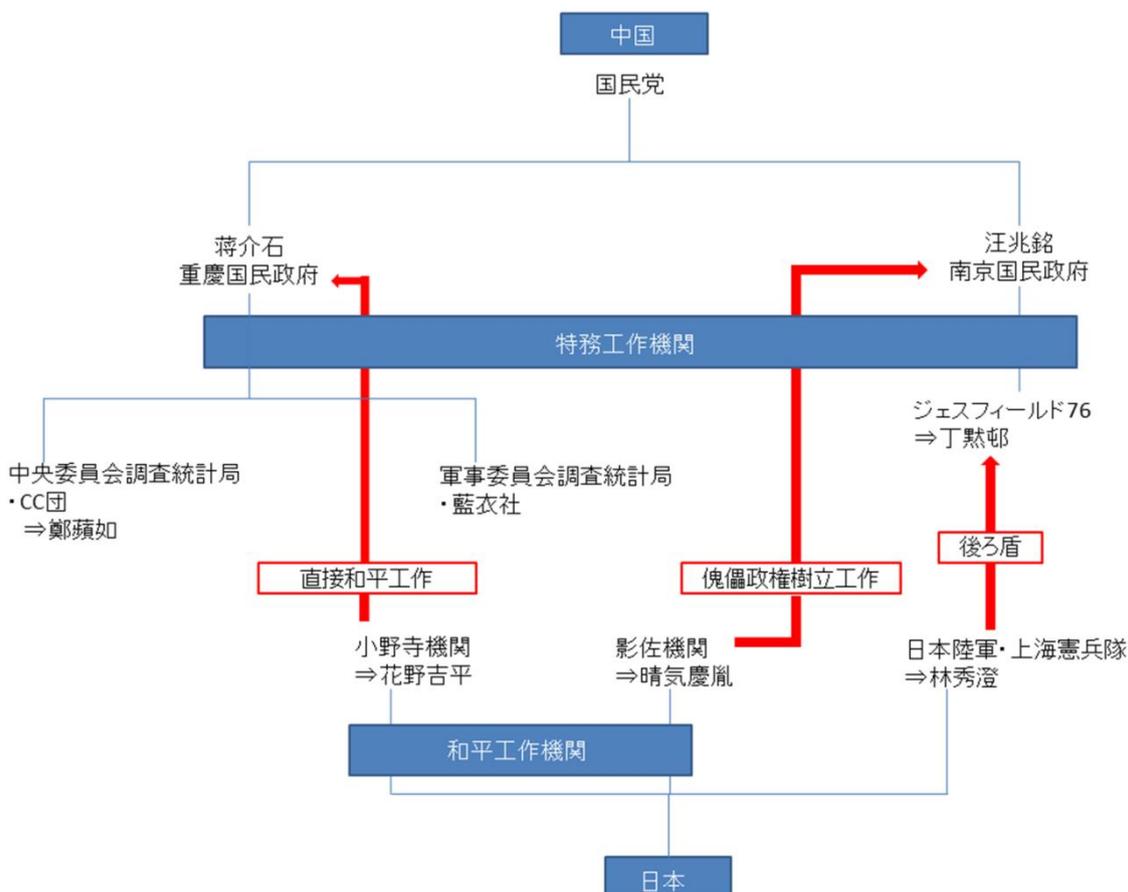
父の祖国である中国へ初めて渡ったその年、鄭蘋如に弟が誕生する。長男の海澄（かいちょう、Haichen）である。1919年には次男の南陽（なんよう、Nanyang）、1926年には三女の静芝（せいし、Jingzhi。出生時は天如であったが後に静芝と改名）が誕生し鄭家は7人家族となった。1928年からの2年間、鄭蘋如は検察官として働いていた父の転勤に伴い南京で生活をする。上海へ帰ってきた1930年、16歳になった鄭蘋如は私立大同大学付属中学に転入し、その2年後に蒋介石の秘密組織CC団が作った学校である私立上海民光中学校高等部(6年制)に二年生として転入した。1936年2月、鄭蘋如は民光中学を卒業、上海法政学院に2年生として編入し、法律を学び始めた。

翌年の1937年7月7日に盧溝橋事件が勃発し、日中戦争が始まると鄭蘋如の諜報員としての活動も始まる。1938年の1月から5月にかけては日本陸軍情報部が上海に設立したラジオ放送局「大上海放送局」でアナウンサーを務めているが、これも日本人のネットワークを作るための手段であった。彼女はここから約2年半という短い諜報員としての活動期間の中で二つの大きな工作活動に関わっている。

一つ目が「小野寺機関」による和平工作である。この頃、日中戦争の長期化に焦慮し、事態の早期終結を水面下で進めようとした日本陸軍は謀略組織、影佐機関を設立し、蒋介石と対立していた汪兆銘を代表とする傀儡政権樹立工作を開始する。1938年10月、影佐機関による汪兆銘政権樹立工作と対立することになるもう一つの謀略組織、小野寺機関が設立され、鄭蘋如は国民党の諜報員という身分を隠して直接和平交渉に参加することにな

る。1939年3月、25歳で上海法政学院を卒業する。同じころ、上海の東亜同文書院で学生主事を務めていた近衛文麿元総理の息子、近衛文隆に接触、文隆を小野寺機関に参加させる。近衛文隆の協力の下、和平工作は進んでいたが、同年5月には影佐機関が進める汪兆銘政権樹立工作が政府に採用され、小野寺機関は解体される。

二つ目は「丁黙邨暗殺未遂事件」である。1938年4月、鄭蘋如が所属していた国民党CC団の大物、熊剣東が日本陸軍の支援を受けて設立された抗日テロ弾圧組織、特務機関特工総部（ジェスフィールド76、76号）に拘束される。ジェスフィールド76が熊剣東釈放の交換条件として鄭蘋如との面会を求め、当時のトップである丁黙邨（てい もくそん、Ding Mocun）と接触する。当時、国民党CC団とジェスフィールド76は敵対関係にあったことからCC団幹部は鄭蘋如に丁黙邨と接触を続けるよう命令する。同年12月10日、21日と2度の暗殺計画を実施するも失敗に終わる。この事件後、鄭蘋如は日本陸軍及びジェスフィールド76によって追われることとなり、2度目の暗殺失敗から3日後の1939年12月24日、鄭蘋如は親交のあった上海憲兵隊分隊長藤野に連絡をしたうえ、自首、ジェスフィールド76によって身柄を拘束される。年が明けた1940年2月、当時26歳の鄭蘋如は日本陸軍及びジェスフィールド76により処刑される。



さて、鄭蘋如の人生を振り返る中で、3つの疑問が浮かび上がった。

- (1) なぜ抗日運動に身を投じ、どのようにして諜報員になったのか
- (2) 諜報員としてどのように日本人と関わっていたのか
- (3) なぜ処刑されたのか

次章では、『美貌のスパイ鄭蘋如—ふたつの祖国に引き裂かれた家族の悲劇』に加えて鄭家の末娘である鄭静芝氏のインタビュー記事や当時の鄭蘋如を知る人々による資料をもとに以上の疑問について考えると共に、彼女がどのような人物であったのか読み解いていきたい。

## 第四章：鄭蘋如とはどのような人物か

鄭蘋如がどのような人物であったのかを知るために重要なことが一点ある。それは鄭蘋如の出自である。前述したように、彼女は中国人の父と日本人の母の間に生まれた。そうしたルーツは彼女の人生に大きくかかわってくるアイデンティティの一つであり、本章で鄭蘋如に関する疑問について考えるにあたって、まずは鄭家の両親、鄭鉞と木村はなについて述べたい。

1878年、浙江省蘭溪県に誕生した鄭鉞は1906年に28歳で浙江省の官費留学生として来日した。東京・上野の岩倉鉄道学校（現・岩倉高等学校）に入学後、1908年に法政大学専門部に転入した。当時、日本には約1万人近い清国からの留学生が来日していた。鄭鉞が来日する1年ほど前、後年、初代中華民国臨時大總統となり、「中国革命の父」と呼ばれた孫文も来日していた。孫文が東京で中国革命をめざす組織で中国最初の本格的政党となる「中国同盟会」を結成すると、鄭鉞も他の留学生同様に入会し、母国の革命の為に活動するようになる。そうした中で出会ったのが、妻となる日本人女性、木村はなであった。

木村はなは1886年に茨城県に生まれた。はながいつ東京に出てきたのか、詳細な記録は残っていないが、彼女と鄭鉞ら中国人留学生との出会いは奉公先でのことであった。はなが奉公していた牛込区東五軒町二十番地（現・東京都新宿区）の「林館」は中国同盟会設立メンバーの一人、黄興の下宿先であり、同盟会に所属する多くの中国人留学生が出入りしていた。鄭家の三女・静芝によると、はなはここで奉公人としての仕事以外にも同盟会の手伝いとして書類や手紙の整理を行っており、その中で鄭鉞と親しくなり、恋仲になったという。当時1906年、はなが20歳の頃であった。<sup>1</sup> 鄭家の長男・海澄の息子で鄭蘋如の甥にあたる鄭国基（てい こくき、Zheng Guoji）は祖母のはなについて「当時、祖母のはなは反清国を掲げて革命を進めようとする中国の留学生たちを支持していました。経済面においても、そのほかの面においても彼らを支援していたのです」<sup>2</sup>と語っている。

鄭鉞とはなが結婚し、籍を入れたのがいつであったのか詳細な記録は残っていない。当時の日本では国際結婚は珍しいものであり、また、1895年に終結した日清戦争から10年ほどしか経っていない当時の日本社会を考慮すると、敵国であった中国人との結婚が反対されたであろうことは想像に難くない。実際に、はなの親類は二人の結婚に大反対であったという。静芝は母から聞いた話として「母は一家の9人目の子供で、父との結婚はまさに革命でした。母の家族は娘が中国人と結婚することに反対で、戸籍から母の名前を消したのです」と語っている。<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 柳沢隆行『美貌のスパイ鄭蘋如—ふたつの祖国に引き裂かれた家族の悲劇』、光人社、2010年、P29

<sup>2</sup> 中国中央電視台『人物 秘密战线中的女性』

<sup>3</sup> 鄭静芝口述・楊瑩整理「鄭蘋如妹妹述説家史(2009)」(天涯2010年第2期) p.64

時は流れ、1911 年になると中国では辛亥革命が勃発、翌 1912 年には清朝が変わって中華民国が成立し、孫文が初代臨時大総統に就任した。この年、鄭鉞とはなにも大きな変化が訪れる。2 月に長女となる真如が誕生したのだ。また、鄭鉞は法政大学専門部を卒業し、法政大学法律科に入学する。そして、1914 年 5 月 15 日には次女・蘋如が誕生する。はなは娘のことを「ひんじょ」という日本語読みで呼んでいたという。その後、鄭鉞は 1916 年に第 32 期生として法政大学を卒業すると、母国に戻ることを決意する。当時、鄭鉞 38 歳、はな 30 歳、鄭鉞の来日からすでに 10 年が経っていた。はなは夫の想いを尊重し、日本を離れることを決断した。そして、同年秋に夫婦は幼い二人の娘を連れて横浜から上海を目指したのであった。

### (1) なぜ抗日運動に身を投じ、どのようにして諜報員になったのか

鄭蘋如が日本を離れ上海に渡ったのは 2 歳の頃であった。本章ではそんな上海での彼女の人生について考えるためにまずは当時の上海について解説をしたい。

1843 年、アヘン戦争に勝利したイギリスが自由貿易の拠点として開港させたのが上海の始まりである。イギリスに次いでアメリカ、フランスも次々に租界（外国人居留地）を設置し、ヨーロッパさながらの街を築き上げていた。今も黄浦江のウォーターフロントには、石造りの堂々たる西洋建築が立ち並んでいる。第二次世界大戦終結までの約百年間、上海は中国の地であって中国でない、世界でも稀に見る国際都市として発展したのである。

鄭蘋如が大学生になり、諜報活動を始めた 1930 年代は上海が最も輝いていた時代であった。当時の人口は 300 万を超え、ロンドン、ニューヨーク、東京、ベルリン、パリに次ぐ世界第六位の大都会になっていた。アジアにおける貿易や金融、商工業の中心として、上海は世界中の人々を惹きつけ、中国人の富裕層やインテリ、労働者や革命家も流れ込んだ。街は大まかに三つのエリアに分かれ、イギリス人が支配する共同租界、フランス租界、そして中国人が住む南市となっていた。租界は外国人の占有区域ではなく、多くの中国人も住んでいた。日本人は共同租界のはずれにある虹口（ほんきゅう）地区に集住していた。

このような上海の情勢を考慮した上で、鄭蘋如がどのような人物であったのか、考えて行きたい。

日本人と中国人の間に生まれた鄭蘋如がなぜ抗日運動に参加し、諜報員として活躍するようになったのか。それを読み解く鍵は彼女が 10 代であった頃の生活に隠されている。幼少期から諜報員となるまでの十数年間を振り返り、何が彼女を突き動かしたのか考えたい。

1916 年秋、上海に渡った鄭一家はフランス租界の一角で生活を始めた。移住してすぐに長男の海澄が、3 年後の 1919 年には次男の南陽、1926 年には末娘の静芝が誕生し家族は 7 人となった。子供たちが幼かったこの頃、中国各地で排日運動が勃発していた。1919 年北

京で始まった五四運動、1925年上海で起こった五・三〇事件がその筆頭である。そのため、母の木村はなは子供たちに中国語で接していたという。後に鄭蘋如と知り合う日本人の映画プロデューサー松崎啓次は、はなについて以下のような記述を残している。

彼女の母親は、母國と、夫の國とが、敵と敵とに對峙して居り、夫が租界の法院に職を持つ今、彼女も亦、國籍を祕し、支那服をまとひ、支那の言葉を語つて居た。が、言葉を支那に變へても、彼女の心は日本を想つて居たのだ。母は、夫にも召使にもドアを閉じ、そのひとりの娘に、「ア、イ、ウ、エ、オ」を教へた。「コ、ン、ニ、チ、ワ」を教へた。<sup>4</sup>

この様に家の中ではこっそりと日本語の歌や童話を聞かせており、末娘の静芝は現在でも母が聞かせてくれた「ハトポッポ」や「もしもしカメよ」を覚えていた。

また、鄭鉞は厳格な父であった。静芝は「家庭のしつけは非常に厳格で、我が家は特別なのだとずっと感じていた」と語っている。また、門限が厳しく定められ、外泊も許されなかった。<sup>5</sup> 特に、娘たちの交友関係には厳しく、たとえ女友達であっても鄭鉞によってあれこれと質問をされていた。静芝は「男性であれば三代上の祖先まで徹底的に調べられていただろう」と冗談交じりに語っている。<sup>6</sup> そんな家庭で育った鄭蘋如が抗日運動に身を投げ始めたのは1931年に起こった満州事変の後である。この年、17歳になった姉・鄭蘋如の当時の様子を静芝はこう語っている。

姉は比較的活発な性格をしており、中学のころには打倒日本などと書かれた宣伝ビラやポスターを作り、愛国心を強く持っていました。母はそうした姉の行動には口を出さず、好きなようにさせていました。私が幼かったころ、我が家に突如として数台のミシンが届き、姉が同級生と共に負傷兵用の衣服を作っていたことは今でも覚えています。<sup>7</sup>

彼女をこのような抗日運動に駆り立てたのは一体何であったのだろうか。鄭蘋如は手記などを残しておらず、その真意ははっきりしていない。しかし、当時の上海の様子を記録した資料や周囲の人々の声からある動機が浮かび上がってきた。それは単純な日本に対する憎しみなどではなく、「中国人であることを認められたい」という純粋な願いである。こうした感情は満州事変後に上海でますます熾烈となった排日思想からきたものであろう。満州事変から一か月後の10月3日、上海では対日経済断交なるものが施行された。その内容は以下のとおりである。

---

<sup>4</sup> 松崎啓次『上海人文記』（高山書院、1941年）→復刻版（大空社、2002年）p.8

<sup>5</sup> 鄭静芝口述・楊瑩整理「鄭蘋如妹妹述説家史(2009)」(天涯2010年第2期)p.65

<sup>6</sup> 同注 5p.66

<sup>7</sup> 同注 5p.65

- 一、日貨を買わず、売らず、運ばず、用いず
- 二、原料およびいっさいの物品を日本人に供給せず
- 三、日本船に乗らず、荷揚げせず、積荷せず
- 四、日本銀行紙幣を受け取らず、取引せず
- 五、日本人と共同せず、日本人に雇われず
- 六、日本新聞に公告せず、中国紙に日貨の広告を載せず
- 七、日本人と応対せず<sup>8</sup>

これらの規定に違反した者は厳しく罰せられており、また当時は日本人の児童への投石事件なども相次ぎ、虹口の学校では休校となる事態も多かった。このような状況下で日本人の母を持つ鄭家の子供たちに向けられた世間の視線は厳しいものであった。鄭国基は祖母の木村はなから聞いた話としてこのように語っている。

叔母(鄭蘋如)は父の祖国である中国も、母の祖国である日本も愛していました。しかし、日中の混血であることが周りに知れると日本人児童と同様に投石やいじめを受けることもあったといえます。<sup>9</sup>

また、のちに鄭蘋如が諜報員として工作活動を行う際に対立することとなる工作機関のメンバーであった国会議員の犬養健は著書の中で鄭蘋如が抗日運動に参加するようになった経緯としてこう記している。

丁度この頃は上海で激戦(上海事変を指す)の行われた直後で、テロ横行の絶頂期であったから、検察官の父親はことさらに忙しく、家にいた例がない。ところが母親は抗戦の敵国である日本の婦人だから、万事世間に肩身が狭い。自然、近所の井戸端会議からも遠のいている。娘についての噂もどうやら世間並みの母親ほどには耳に入りにくい。一こんな風で、蘋如が学校を欠席しがちになるすべての要因が整っていった。<sup>10</sup>

中国人の父を持ち、中国語を話し、中国で育ってきたにも関わらず、周囲からは敵国の一員という扱いを受ける。一方でそうした原因を作っている国、日本もまた母の祖国であり、自分自身が生まれた地であるのだ。17歳の少女の心にこうした矛盾は計り知れない影を落としたに違いない。抗日活動をすることは彼女の「自分は中国人である」という主張そのものであったのではないだろうか。それを示すように、1937年7月7日に盧溝橋事件

---

<sup>8</sup> NHK “ドキュメント昭和” 取材班編『ドキュメント昭和 2 上海共同租界』(角川書店、1986年) p.160

<sup>9</sup> 読売テレビ「日中戦争秘話 ふたつの祖国をもつ女諜報員～鄭蘋如の真実」(2008年8月24日放送)

<sup>10</sup> 犬養健『揚子江は今も流れている』(文芸春秋新社、1960年) p.238

が勃発し日中がついに本格的な戦争に突入すると、それまで一学生として抗日運動に参加していた鄭蘋如は諜報員として活動を始める。このとき鄭蘋如 23 歳、上海の法政学院法律科を卒業して一年がたったころであった。この頃、上海在住の日本人が行っていた反戦集会で彼女の姿が見られるようになる。抗日運動に熱心だった若い彼女が一体どのようにして上海在住の日本人たちと知り合い、なぜ日本人による反戦集会に顔を出すようになったのであろうか。その真相について静芝はこのように説明している。

姉が反戦抗日運動に参加するようになったのは、母方の伯父の影響を大きく受けています。伯父の名は阪といい、母が中国に渡ったのちに上海にやってくる、徐耀中という中国名を名乗るようになりました。中国語や京劇を学んでおり、その後中国人女性を妻にしました。(中略) 日中開戦後、彼は反戦を訴える集会に参加するようになり、後に姉もたびたびそうした集会に出るようになりました。(中略) 当時、姉と伯父はどちらも日中が戦争することに反対しており、非常に親しくなっていました。後になって知ったことですが、実は姉が伯父と親しくし、反戦集会に参加したのは中国の為に何かしたいという思いからでした。(中略) 姉は集会で知り合った反戦派の日本人と頻りにやりとりをしていました。そしてそこで得た情報を国民党中央委員会調査統計局の稽という人物に流していたのです。<sup>11</sup>

稽とは鄭蘋如と同じ法政学院の卒業生である稽希宗(けい きそう、Ji Xizong)を指している。彼は国民党の特務工作機関である CC 団のメンバーであり、CC 団設立者の陳立夫(ちん りつぷ、Chen Lifu)のいとこであった。ここで、この先の内容の理解を深めるために益井康一氏の『漢奸裁判史』を一部引用し、特務工作とは何かを説明したい。

特務工作とは、「ある政治勢力が、人知れず地下で行う秘密の非常工作」で、したがって極端な政治警察といえる。特務工作の目的は、消極面では自党内の異分子や反逆者を摘発して、党の結束を固め、おのが党を敵の切り崩しから守ると共に、積極面では敵勢力の切り崩しを図って、自党の政権の掌握や維持のため、非常手段を講じることにある。特務工作機関は一切の法律や軍規を超越した絶対的の秘密組織で、目的達成のために地下に潜って、偵察、暗殺、破壊、拘禁等あらゆる非常手段を用いる。あたかも姿なき通り魔のように、一定の形式、一定の時間、一定の場所を持たずして、電光石火的に行われる血なまぐさいテロ、それが特務工作である。それは革命中国の特異な性格でもある。戦時下日本の中野学校や米国 CIA の暗殺、破壊工作、また最近国際的に頻発する過激派の爆弾テロ等の原型

<sup>11</sup> 鄭静芝口述・楊瑩整理「鄭蘋如妹妹述説家史(2009)」(天涯 2010 年第 2 期) p.65

である。<sup>12</sup>

以上のように特務工作機関とは平たく言えば党が所有するスパイ・テロ組織である。鄭蘋如が CC 団への情報提供者となった 1937 年時点では蒋介石国民政府はこの CC 団のほか、軍出身者で編成された軍隊内の特務工作機関である藍衣社という二つの組織を持っていた。この二つは翌年 8 月に編成が行われ、CC 団は中央委員会調査統計局（以下、中統と略）へ、藍衣社は軍事委員会調査統計局（以下、軍統と略）へと編成されることとなる。

ここで一つの疑問が生じる。前述したように鄭蘋如の父・鄭鉞は子供たちに厳しいしつけをしており、交友関係にも目を光らせていた。それにも関わらず、鄭蘋如はなぜ特務工作機関のように危ない組織に所属する稽希宗と交流を持てたのであろうか。それは稽希宗の叔父で CC 団設立者の陳立夫が鄭鉞の友人であったからだ。こうして鄭蘋如は国民党への情報提供者として諜報員の道を歩むこととなったのである。

同年 12 月には更なる日本人ネットワークへの介入を目的として日本陸軍情報部が上海に設立したラジオ放送局「大上海放送局」でアナウンサーとして勤務するようになる。この仕事の仲介をしたのは驚くことに母・木村はなであった。はなは知り合いであった陸軍少佐に直接掛け合い、『娘を、日本のために役立ててください。娘は、上海語と、北京語と、英語を、自国語の様に話します。それから、日本語も少しは、きっとあの子は、私の代わりに、日本の為に働いてくれるでしょう』と話したという。<sup>13</sup> しかし、鄭蘋如は母親には諜報活動のことを隠していたため、はなの「娘を日本の為に役立ててほしい」という願いは思わぬ方向に利用されることとなったのである。

## （2）諜報員としてどのように日本人と関わっていたのか

鄭蘋如は 1938 年以降、諜報員としての活動の中で多くの日本人と知り合っている。国民党に日本側の情報をもたらす手段としての付き合いもあった一方、友人として親しくしていた日本人もいた。ここではそうした日本人たちが残した記述をもとに、鄭蘋如がどのように上海に暮らす日本人たちと関わっていたのか、日本人の目から見た鄭蘋如の姿を明らかにしていきたい。

1938 年の 1 月、アナウンサーとしてラジオ放送局「大上海放送局」に勤務し始めた鄭蘋如に会った日本人がいる。後の東宝株式会社の映画プロデューサーであり、当時取材のため上海に滞在していた松崎啓次だ。彼は上海での生活について綴った手記の中で鄭蘋如を

<sup>12</sup> 益井康一『漢奸裁判史』（みすず書房、1977 年）p.197

<sup>13</sup> 松崎啓次『上海人文記』（高山書院、1941 年）→復刻版（大空社、2002 年）p.8

載志華という仮名で登場させ、彼女との出会いについて詳細に書き残している。以下、一部を抜粋し、彼の目から見た鄭蘋如の様子を記したい。

その放送局を訪問した最初の日に、私は、載志華を見たのである。彼女は、マイクの前に座っていた。つい一分後に迫った彼女の放送を待つ爲に。面長で、丈高く、皮膚はぬける様に白く、きれ目の長い、細い眼、私は彼女をととても美しいと思つた。彼女は、マイクの位置をきめたり、ピアノを動かしたりして、忙しく働いて居る日本の事務員と、戯談を云つて居た。「アタシ、コヒビトアル」「誰？」「アノヒト」彼女は指ざした。そこに立つてるのは、新井さんと云ふ日本のお嬢さん。私を今此處へ案内してくれた人。

(中略)

載小姐は、話しづづける。「アノヒト、アタシノコヒビト、アタシ、アノヒトノコヒビト、ネ」「ン、そをよ、你、我的爱人、我你的爱人、そをね」新井さんも、笑ひながら答へる。かうして、男達丈の中で働く女達は、國籍を越えて、この様に同盟し、男達から自分を守らうとするのであらうか。載志華の放送が始まつた。「日本軍は、南京入城後……杭州を、……云々、」ニュースである。玉をころがす様な聲、少し巻き舌の北方系の北京語、私は、載小姐の放送を音楽の様にきいた。美しい聲である。放送室を出ると、私は新井さんにきいた。「あの人、誰？」「？載さんのこと」「載さん？ん、あの人」「綺麗でせう、あの人！お母さん日本人よ、でも、日本のこと何も知らないの、をかしいわね」<sup>14</sup>

ここで松崎啓次は鄭蘋如を美人であると評しているが、当時 23 歳の彼女は非常に目立つ存在であつた。彼女について記されている様々な資料には必ずと言ってよいほど容姿を褒める一言が添えられている。例えば後に鄭蘋如の処刑に同行することとなる日本軍陸軍少佐の林秀澄はこう述べている。

その比小野寺機関によく出入りします支那人のものすごい美人がおりまして、その美人の名は鄭蘋如というんでございますが（中略）そういう女がおりまして、これは母が日本人で父親がフランス租界にありますいわゆる特区法院の判事です。日本人と中国人の合の子で、それでもものすごく学生時代からミス上海などといわれておつた美人でした<sup>15</sup>

この様に鄭蘋如は中国人と日本人の間に生まれたという生い立ちに加え、周囲が驚くほどの美貌の持ち主、という否が応でも注目が集まる女性であつた。また、性格は明るく活

<sup>14</sup> 松崎啓次『上海人文記』（高山書院、1941年）→復刻版（大空社、2002年）p.5

<sup>15</sup> 東京大学教養学部木戸日記研究会『林秀澄氏談話速記録Ⅲ』（日本近代史料研究会、1977年）p.115

発で、前述した松崎啓次の記述からもわかるように放送局の同僚である日本人女性とも冗談を言い、笑いあうような親しい友好関係を築いていた。松崎は非常にリベラルな考え方の持ち主であり、国籍に関係なく非常に多くの中国人と交流を持っていた。鄭蘋如ともラジオ局で知り合ったのち幾度かパーティーや宴席の場で再会しており、松崎が一時帰国する前日にも友人を交えて食事会を開いている。その宴席で鄭蘋如は松崎に意味深な一言を投げかけている。

「松崎先生！」と載小姐が、呼んだ。「アナタ、アス、ニホンへ帰るのですか」「ええ」「好いですね」「……」「アタシ、日本の人、みんな日本へ帰ると好いと思ふの」「……」「ね、みなさん、そうでせう。日本の人が、みんな日本へ帰つたら、戦争が終るのですもの」<sup>16</sup>

この頃はちょうど1938年の年末である。日本では長引く日中戦争の終結を目指して汪兆銘工作を行う影佐機関と、それに対抗し直接和平を目指す小野寺機関が設立され、水面下で動き始めていた。鄭蘋如もすでに国民党の諜報員として小野寺機関の一員となり、和平工作に向けて奔走していた。そうした中で彼女が思わず口にした松崎への言葉は彼女の本音であろうと推測される。その後、日本に戻った松崎は1941年に国策映画「上海の月」を制作している。映画の内容は抗日スパイであるアナウンサーの女性が日本人男性と恋に落ち、親日派に寝返る、というものでそのキャラクター設定から明らかに鄭蘋如をモデルに原作を書いたということがわかる。松崎にとって鄭蘋如との出会いはそれほど印象的なものであったのだ。

鄭蘋如の周囲にいた日本人として忘れてはならないのが中支派遣軍特務部思想第一班の花野吉平だ。花野は1912年北海道で生まれた。1935年に23歳で満州の官僚養成機関である大同学院に入学し、1937年秋から上海特務部思想第一班で勤務し始めた。この思想第一班の任務は上海の日本軍占領地内での特務機関の指導と情報収集とされており、その中で花野は租界内と担当区域として活動していた。しかし、彼自身は著書の中で自らの仕事を「われわれの行動は中野学校的スパイ活動でも、謀略工作を任務とするものでもなく、重慶側または反日中国人とは当方の目的立場を明確にして、どうしたら戦争を停止することができるかなどのコミュニケーションを求めることにあつた」<sup>17</sup>と語っている。このようなことから第一班の班員はみな一市民として戦争終結策を追及するという目的を持っていたが、その思想の性質から周囲の職業軍人からは好感をもたれていなかったという。中国の歴史研究者、許洪新は鄭蘋如について書いた記事の中で花野を「揺るぎのない反戦派」<sup>18</sup>と

<sup>16</sup> 松崎啓次『上海人文記』（高山書院、1941年）→復刻版（大空社、2002年）p.23

<sup>17</sup> 花野吉平『歴史の証言—満州に生きて』（龍溪書舎、1979年）p.39

<sup>18</sup> 許洪新「真实的鄭蘋如（中）」（檔案春秋2008年第5期）p.39

評している。その理由は花野の戦争終結を求める発言の数々である。花野は当時の職務について初めて行われた特務部全体での報告会議の場で自分が収集した情報と人脈から分析を行い、日本がすべきことは「中国からの撤兵」「現地における謀略軍人と戦争拡大派に対する断固たる粛清」の二点であると述べたのだ。この発言には会議に出席していた軍務課長やすでに汪兆銘政権樹立工作进行を指揮していた影佐大佐も驚き、物議をかもした。<sup>19</sup>

そんな花野と鄭蘋如はどのようにして出会ったのだろうか。花野は著書の中で上海赴任直後の1937年10月に鄭蘋如を知り、鄭鉞一家と親交を始めたことと記しているがそのきっかけについて言及していない。その真相は柳沢隆行が静芝への取材で解き明かしている。静芝によると特務部は発足当初から日中二か国語を話せる人材を求めており、それを知った阪義雄が鄭蘋如を紹介したのだ。花野はもともと反日中国人らとの対話を仕事としていたため鄭蘋如のことも国民党側の諜報員だと知りながら仲間に引き入れた。その後、鄭蘋如は週2、3回のペースで特務部に出向き、花野ら思想班の仕事をサポートしていた。<sup>20</sup> また鄭蘋如はこうした一連の活動参加するときは鄭家次男の南陽か末っ子の静芝と一緒に連れて参加していた。それはスパイ活動を怪しまれないためのカムフラージュであると同時に、南陽は日本語の通訳を、また静芝は重要な手紙や文章を届ける役目を担っていた。このようなことがあったため、花野は次第に鄭蘋如のみならず鄭一家とも付き合いも深めていった。

1938年、影佐機関が進める汪兆銘政権樹立工作に対抗し、新たな和平工作機関が設立された。蒋介石との直接和平を目指す小野寺信陸軍少佐率いる小野寺機関だ。ここには花野の同僚で鄭蘋如と親しかった早水親重と彼に誘われた鄭蘋如も所属している。直接和平を行うには中国側の工作員と信頼関係を築き、蒋介石までのルートを作らなければならず、花野は日本陸軍憲兵隊により逮捕された中国人工作員の釈放を手助けしていた。1938年のある日、そうした行動のお礼にと花野や速水といった思想第一班のメンバーは鄭蘋如を含めた中国人工作員8名との宴席に招待されている。その中で日本側はある発言をし、またもや周囲を驚かすこととなる。以下、花野の著書から宴席での発言を抜粋する。

われわれ三人※（花野、三木亮考、早水親重）が強くここで主張したことは次のような要旨であった。

一、軍機関に所属して日本軍閥の墮落と日本帝国主義を肌で感じている。軍機関に所属しているのは、中国民族の最前線で活躍する工作員の皆さんを民族の戦士として尊敬するもので、漢奸にしようとか、現体制維持のスパイ諜報のためではない。われわれにも同志が軍部にも民間にも居り、日本革命の戦士として、死を

<sup>19</sup> 花野吉平『歴史の証言—満州に生きて』（龍溪書舎、1979年）p.41

<sup>20</sup> 柳沢隆行著『美貌のスパイ鄭蘋如—ふたつの祖国に引き裂かれた家族の悲劇』（光人社、2010年）p.166

いとわず秘策を実践する覚悟である。どうかわれらの行動を知って信頼してほしい。

二、両国民族の政治革命は両国の実践者の力量によるもので、日本はわれらの同士によって行動するが、中国は諸君等によって実践すべきであり、中国民族統一の思想として孫文の三民主義を支持するものである。そこには両民族の同志的結合が必要である。

三、現実の惨憺たる戦争を性急に停止する方策を発見して、日本軍閥誅伐と日本革命に挺身するが、その方略に協力してほしい。<sup>21</sup>

以上の発言を聞いた中国側は一様に驚いた様子であったが、その後花野らに対して好意的に接するようになったという。ひたむきに、ただ両国の平和を目指して停戦のために奔走する花野や早水の姿は鄭蘋如の目にどう映ったのであろうか。彼や小野寺機関は直接和平工作を行うにあたって「中国からの撤兵」が不可欠であり、この条件の下で蒋介石を説得しようと考えていた。ここで前述した鄭蘋如と松崎啓次の会話を再度見直してみると、彼女が投げかけた「日本の人が、みんな日本へ帰つたら、戦争が終るのですもの」というセリフは明らかに花野や小野寺機関での仕事の影響を受けていることがわかる。反戦派とはいえ軍に所属する花野と国民党の諜報員である鄭蘋如はそれぞれのバックグラウンドも守ろうとする国も違っていた。しかし、「戦争を終わらせたい」という思いでつながり、その中で多くの違いを乗り越えて友情と言えるものを築いていたことは間違いのないであろう。

小野寺機関では当時上海に滞在しており、花野や鄭蘋如と共に直接和平工作を行っていた元首相近衛文麿の息子・近衛文隆の協力の下、様々な根回しを行っていた。しかしながら対立する影佐機関の妨害を受け、徐々にその活動は封じ込められていった。1939年6月6日、日本政府は来日中であった汪兆銘と会談を行い、汪兆銘政権樹立に国策を一本化し直接和平工作を禁止する「対支那処理要綱」を決定したのである。この閣議決定後、上海では反汪兆銘派、反影佐機関派の弾圧及び摘発が始まった。つまり、小野寺機関のメンバーは一夜にして国家から追われる立場となったのである。この時のことについて花野は著書の中でこう語っている。

私は中国側から狙撃されることなどはまったく考えたこともなかったが、日本軍閥によって消される危険は多分にあったと思う。よく中国の工作員に敵は“あなたら”ではなく日本の軍閥だ、と行って笑ったものであるが、彼らは真剣に中国奥地への脱出をすすめてくれたりしたので、私の決戦場は東京だよと、好意を謝したことがある。<sup>22</sup>

<sup>21</sup> 花野吉平『歴史の証言―満州に生きて』(龍溪書舎、1979年) p.176

<sup>22</sup> 同注 21p.185

「対支那処理要綱」が決定されてから一か月ほどたったころ、花野と早水は取り調べもされないまま上海憲兵隊によって逮捕された。憲兵隊長の少佐は彼らに向かって「(お前たちは) 軍の秘密を敵に売った売国奴であり、スパイであり、民間人に流言した非国民として銃殺に処す」と言い放った。<sup>23</sup> 結果、二人は銃殺されることはなく約 8 か月に及ぶ拘留期間を経て、翌年 1940 年 3 月、汪兆銘率いる南京国民政府樹立の翌日に釈放された。しかし、再び上海の街に戻った花野を待っていたのは「親愛なる中国人工作員が、日本の憲兵隊によって銃殺されていた」という知らせであった。花野吉平の親友、鄭蘋如は彼の釈放を待たずしてこの世を去っていたのである。

### (3) なぜ鄭蘋如は処刑されたのか

汪兆銘政権が樹立し、花野吉平が釈放された 1940 年からさかのぼること 1 年前、上海法政学院を卒業したばかりの鄭蘋如は中統の指示の下、ある人物と接触していた。それは後に彼女の運命を左右することとなる暗殺未遂事件の中心人物であり、対重慶特務工作機関ジェスフィールド 76 の発起人、丁黙邨であった。

鄭蘋如と丁黙邨の間に何が起こったのか、それを知るには丁黙邨とはいったい何者なのか、そしてジェスフィールド 76 とはどのような機関であるのかを知る必要がある。丁黙邨は 1903 年、湖南省に生まれた。1924 年、21 歳で国民党に加入すると秘密特務工作に関わる部署で徐々にその地位を確立し、1934 年には後の軍統の最高幹部にまで上り詰めた。またこの年、丁黙邨は仕事の一環として鄭蘋如も通っていた国民党が運営する民光中学の理事を務めている。一部の資料や創作物の中では鄭蘋如と丁黙邨がこの時期に民光中学で知り合ったと書かれているがそれは明らかな間違いであると柳沢隆行が指摘している。というのも、鄭蘋如は前年 9 月には父の転勤により蘇州の学校に転校しており、上海に戻って民光中学に復学したのは既に丁黙邨が去った後の 1935 年 9 月であるからだ。順調に出世の道を歩んでいた丁黙邨であったが、1938 年秋に国民党内の組織再編によりポストを失ったことで組織と衝突し、国民党を追われることとなった。

半年後の 1939 年 2 月、彼が元同僚で同じく国民党を追われた李士群（り しぐん、Li Shiqun）とともに姿を現したのはかつて国民党時代に敵として戦っていた上海の日本陸軍のもとであった。彼らは日本陸軍関係者に向かって以下のことを主張・要求した。

- ・戦争を長引かせているのは国民党であり、我々は断固としてこれに反対する。
- ・日本陸軍が手を焼いている抗日テロ組織は我々がかつて所属していた部署であり、内情は知り尽くしている。中国人には中国人によるテロで対抗すべきである。
- ・上海で抗日テロを弾圧するため特務工作機関を設立したく、そのための支援を

<sup>23</sup> 花野吉平『歴史の証言—満州に生きて』（龍溪書舎、1979 年）p.47

日本軍に願いたい。<sup>24</sup>

実際に重慶側の特務工作機関に手を焼いていた日本陸軍はすぐに丁黙邨と李士群の提案に乗り、2か月後の1939年4月には上海の共同租界からほど近いジェスフィールド路にある屋敷を拠点とする対重慶特務工作機関「ジェスフィールド76」が生まれた。彼らが敵としたのは蒋介石直属の特務工作機関の藍衣社、国民党の特務工作機関である軍事委員会調査統計局（軍統）、そして鄭蘋如の所属する中統である。設立当初は工作活動が思ったように進まず、日本陸軍内でジェスフィールド76立ち上げの実務担当をしていた晴気慶胤少佐は批判の嵐に神経衰弱気味になっていた。当時のことを彼はこう記している。

重慶側特工隊のテロはますます激しくなるばかりで、昨日も今日もと、犠牲者の報告がつづいてくる。こうなると、私たちの立場が非常に苦しくなってきた。日本軍の内部では、ようやく非難の声が高まりはじめた。“何のための特工ぞ。何のための『76号』ぞ。重慶テロ一掃のために生まれ出た『76号』は、いたずらに金を食うばかりでいったい何をしているのだ”<sup>25</sup>

こうして晴気少佐の悩みの種になっていたジェスフィールド76も夏になるころには活発に活動し始め、対立する重慶側のみならず一般市民からも殺人魔窟と呼ばれ恐れられる存在となっていた。

ここで、話を鄭蘋如と丁黙邨の出会いに戻そう。二人が出会ったきっかけには様々な説がある。ここでは晴気少佐、鄭蘋如の妹・静芝氏そして当事者である丁黙邨の3人の主張を紹介したい。最もドラマティックに二人の出会いを描いているのは晴気少佐である。彼は著書の中で鄭蘋如を「女豹の工作人員」「中国のマタ・ハリ」と評し、師弟関係にあった二人が上海のガーデンプリッジの上で偶然再会、丁黙邨が美しく成長した元教え子に一瞬で心を奪われ、恋に狂う様を描いている。さらには「毒蛇のように恐ろしい地下の暗殺王も、わけもなく彼女の美しい肉体のわなにかかった。女間諜としては、ひどく事務的な肉体の出資であった。美しい重慶の白蛇は、おのが身を捧げながら、逆に『七十六号』のまむしの急所にしっかりと食い下がった。戦いは明らかに白蛇の勝利となっていた」<sup>26</sup>と二人の間に肉体関係があったかのように記述している。

前述したように鄭蘋如と丁黙邨は民光中学での在籍期間が一致していないため、その二人が街で出くわし立ち話をするということは起こりえない。また、鄭蘋如は父の家庭教育が厳しかったことから夜間の外出が制限され、外泊はもつてのほかであったことから鄭蘋

<sup>24</sup> 晴気慶胤『上海テロ工作76号』（毎日新聞社、1980年）p.26

<sup>25</sup> 同注 24p.79

<sup>26</sup> 同上 p.134

如が所謂ハニートラップを仕掛けたということも信用しがたい。

一方で実際の事件を取り上げ、詳細に事のあらましを語っているのが鄭蘋如の妹・静芝である。彼女は1939年3月に国民政府陸軍少将熊剣東が逮捕されたことが二人の出会いのきっかけであったと話す。<sup>27</sup> 熊剣東は遊撃隊の司令塔で上海憲兵隊が血眼になって探していた人物であった。上海憲兵隊は熊剣東の身柄をジェスフィールド76に引き渡し、日本側に寝返らせるために拘留を続けた。そんな中、鄭蘋如のもとを訪れたのは熊の妻である唐逸君であった。唐逸君は鄭家に上がるなり、「私の夫を救うため、漢奸の頭である丁という人物に会ってください。彼があなたに会いたいと言っています」と言い、丁黙邨が過去に民光中学の理事長を務めていたという情報も教えた。彼女の話によると、丁黙邨は熊剣東釈放の条件として「いつも日本人たちと一緒におり、美人で、ある人は日本人だと言い、またある人は中国人だと噂する、私たちにとって非常に不利な存在であるあの女に会いたい」と鄭蘋如との面会を要求したという。黙り込む鄭蘋如に対して唐逸君はさらにこう続けた。「丁と知り合うことはあなたにとっても、あなたのお父さんや家族にとっても悪いことではないでしょう。さもないと、お父さんも通勤で外にいるとき安全ではなくなるもの。」これは明らかな脅しである。鄭蘋如から一連の報告を受けた中統はこの機会を利用して丁黙邨を消し去ろうと画策する。この頃、ジェスフィールド76と重慶側の戦いはますます激しくなり、対立組織のトップである丁黙邨は危険人物としてマークされていたのである。こうして中統から指示を受けた鄭蘋如は民光中学という繋がりを利用して丁黙邨に接近した、というのが静芝の主張だ。また、鄭蘋如はそれまで工作活動について両親には黙っていたが、熊剣東釈放の取引をきっかけに父に相談を持ち掛け、自身が行っていることについてもすべて話したという。

では事件の当事者である丁黙邨はどうであろうか。日中戦争終結後の1946年11月19日から行われた漢奸裁判の判決書によると、中統が二人が民光中学の師弟関係であることを利用して鄭蘋如を彼のもとに送り込んだと証言している。熊剣東を巡る取引については言及されていないものの、民光中学に関する点は静芝の証言と一致している。さらに、裁判では鄭蘋如の弟・南陽がこのような証言をしている。

鄭蘋如の実弟の供述によると、民国二十八年三月、丁は鄭蘋如に「あなたのお父さんは以前高等法院第二分院検察官であったが、何故和平運動に参加しないのか。どうしても参加しないのなら。七十六号はお父さんの命がほしい」といっており、同年十一月、郁華伸が七十六号に殺された直後、丁は姉に、「鶏を殺して犬にくれてやるようになるよ」といったと述べている。<sup>28</sup>

<sup>27</sup> 鄭静芝口述・楊瑩整理「鄭蘋如妹妹述説家史(2009)」(天涯2010年第2期) p.67

<sup>28</sup> 益井康一著『漢奸裁判史』(みすず書房、1977年) p.268。郁華伸とは江蘇高等法院第二分院の刑庭長で、鄭鍼の同僚であり、鄭家とも親交が深かったが、ジェスフィールド76によって暗殺された。

この頃から丁黙邨が鄭蘋如を連れて歩き、ジェスフィールド 76 の拠点に招く姿が度々みられるようになった。また、静芝氏によると丁黙邨から様々な贈り物が届くようになったという。つまり、丁黙邨は美人の鄭蘋如を気に入り、取引と称して彼女と面会した上で家族の身の安全をちらつかせることで従えようとしたのである。丁黙邨が鄭蘋如に夢中になって盲目となっていた、という一点においては晴気少佐の記述も正しかったと言える。

時を同じくして、ジェスフィールド 76 は大きな転換期を迎えていた。汪兆銘政権樹立工作への合流である。1939 年 1 月に国民党を除名され、亡命先のハノイで軍統の襲撃に遭っていた汪兆銘はこの年の 5 月に上海へ帰還するとすぐに丁黙邨、李士群と会談を開きジェスフィールド 76 を自らの政権樹立工作へ迎え入れた。和平工作には重慶側の特務工作を抑え込むことが必要であったからである。その結果、和平工作は第四章(2)で述べたように汪兆銘側が勝利をおさめたのである。汪兆銘政権樹立に国策を一本化し直接和平工作を禁止する「対支那処理要綱」によって所属していた小野寺機関が解散に追い込まれた後、鄭蘋如が中統から与えられた指示は引き続き丁黙邨と接触し、ジェスフィールド 76 の情報を得ることであった。8 月、国民党第六次全国国民代表大会でジェスフィールド 76 が正式に国民党中央執行委員会特務委員会特工総部として汪派国民党の警政部をなすことが決定、丁黙邨は中央執行委員に挙げられ、社会部長という重職を手に入れた。汪兆銘政権という強力な後ろ盾を得たジェスフィールド 76 の動きはさらに活発化し、敵対する特務工作組織を次々と殲滅していった。1939 年 12 月、この攻撃に音を上げた重慶側はついに丁黙邨暗殺計画に踏み出す。そして、その駒として利用されたのが当時 25 歳、丁黙邨のお気に入りとなっていた鄭蘋如であった。

それまで情報収集が仕事であった鄭蘋如にとって暗殺計画に参加するのは本意ではなかったであろう。しかし、11 月には父の同僚である郁華伸がジェスフィールド 76 によって暗殺され、丁黙邨から脅しを受けていた彼女にとって暗殺計画に参加することは家族を守ることもあった。12 月 10 日、一度目の暗殺計画が実行される。鄭蘋如を送り届けに来た丁黙邨を待ち受ける中統のメンバーが射撃するというものであったがタイミングが合わずに失敗に終わる。2 度目の暗殺計画が実行されたのは 12 月末のことであった。以下、丁黙邨の裁判記録から当時の様子を一部抜粋する。

民国二十八年（昭和十四年）十二月十六日、彼女は軍統局の命令で丁黙邨を暗殺するため、丁にクリスマス・プレゼントをねだり、ジェスフィールド路の東に続く静安寺路に誘い出した。そして彼女はシベリア雑貨公司以、アストラカンのオーバーを着て、嬉しそうに表に飛び出した。丁が勘定をすませ彼女の後を追って外に出た途端、何者かが丁を狙って拳銃のつるべ撃ち、通行人の何人かが巻き添えを食って、血濡れになって倒れたが、丁は人並みにまぎれて無事脱出した。「七十六号」に帰った丁は背広のポケットに、一枚の名刺が突っ込まれているのを發

見した。それは鄭蘋如の名刺で、鉛筆で「成仏」と走り書きしてあった。<sup>29</sup>

ここで、丁黙邨暗殺未遂事件が起きた日付について考えてみたい。前述した丁黙邨の裁判記録では12月16日だと述べられているのに対し、静芝や上海憲兵隊の林秀澄少佐はクリスマスイブの12月24日であると証言している。また、当時香港で発行されていた新聞「大広報」は12月31日付けの紙面でこの事件を取り上げ、事件発生は21日夜としている。新聞記事の掲載日時を考慮すると、丁黙邨暗殺未遂事件が決行されたのは少なくとも1939年12月21日以前であり、静芝と林秀澄少佐の24日という証言は何らかの記憶違いである可能性が高い。このようにして二度目の暗殺も失敗に終わり、鄭蘋如は汪兆銘政府及び日本陸軍から追われる存在となったのである。

---

<sup>29</sup> 益井康一著『漢奸裁判史』（みすず書房、1977年）p.271

## 第五章 鄭蘋如の死

暗殺計画が失敗に終わり、現場を離れた鄭蘋如はどうしていたのであろうか。彼女の足取りについては様々な証言がされており、明確なことはわかっていない。ここでは当時のことについて特に詳細な記録を残している林秀澄少佐と静芝の証言を取り上げてみたい。なお、二人はどちらも丁黙邨暗殺未遂事件の発生が12月24日であると証言しているため以下の記述ではその証言通り事件の発生を24日と仮定する。

林秀澄によると暗殺未遂事件があった24日の夜、鄭蘋如は林秀澄の同僚である藤野彎丈少佐に電話をかけてきたという。<sup>30</sup> 藤野彎丈は上海憲兵隊で鄭蘋如の監視役を担っていた人物である。監視役でありながらも彼女には丁寧な態度で接しており一緒に映画を見に出かけるような仲であったため、鄭蘋如も藤野彎丈の身分を知りつつ一定の信頼はおいていた。電話の中で彼女は「藤野さん、私のやったことはいいことでしょうか、悪いことでしょうか、藤野さんはどう思いますか」「私は今どうしたらいいか困っている。日本側に対しても悪いし支那側に対しても悪くて、今支那側から追っかけられておる。家にも帰れん」と話した。この話を聞いた林秀澄は次のように指示をした。

藤野君、君の所以外に鄭蘋如が頼って来る所はないと思うから、だから鄭蘋如をつかまえるなんていうことはおくびにも出さなさんなよ。それで鄭蘋如から電話がかかってきたら大いに同情して、おれのほうで役に立つことがあったらなんでも世話をしてやるから言って来いというようにして、付かず離れず、いわゆる不即不離に彼女との接触だけは断たないようにしてくれよ<sup>31</sup>

鄭蘋如は居場所さえ明かさないものの藤野彎丈に連絡をするようになった。そうして年が明けた1940年、鄭蘋如は突如として藤野彎丈が駐在する連絡所に姿を現し、上海憲兵隊に拘束されることとなった。以上が林秀澄の証言である。

次に妹である静芝の証言を見て行きたい。彼女によると24日の事件後、姉はジェスフィールド76や上海憲兵隊の追跡を逃れるために遠回りをして家に戻ってきたという。<sup>32</sup> また家には丁黙邨から電話がかかってきており、鄭蘋如に自首をするよう勧告した。中統の稽希宗は一度は鄭蘋如に逃走を進めたものの、彼女は家族をおいて逃げることはできないとそれを断り、家族の安全の為に自首することを決めた。翌日の12月25日、鄭蘋如は家族で食事に出かけようと提案し、仕事で不在にしていた父・鄭鉞を残して母や兄妹と共に外食

<sup>30</sup> 東京大学教養学部木戸日記研究会『林秀澄氏談話速記録Ⅲ』（日本近代史料研究会、1977年）p.119

<sup>31</sup> 同注 30 p.120

<sup>32</sup> 鄭静芝口述・楊瑩整理「鄭蘋如妹妹述説家史(2009)」(天涯 2010年第2期) p.69

に出かけた。事件から2日後の26日午後3時、ついに鄭蘋如は家族の下を離れることを決意する。静芝は、一家と共に暮らしていた鄭家の長女・真如の幼い娘が行こうとする鄭蘋如に抱き着いて離さず、泣きわめいていたことを今でも覚えているという。鄭蘋如が去った後の家の様子について静芝が語った証言を一部抜粋して以下に記す。

父は普段6時ごろ仕事から帰るのですが、26日は帰宅が早く、4時半か5時くらいには帰ってきました。父は帰るといつも私の頭を撫でて「いいこにしていたかい？」と聞くのですが、その日は帰るなり母と日本語で話し始めました。父と母は普段は私たち子供の前では日本語を話しません。二人の間でとても重要な何かがあったときだけ部屋のドアを閉めて日本語で話すのです。私はあまり日本語が得意ではないのですが兄は大体のことは聞き取ることができました。父は真っ先に姉がどこにいるのか母に聞くと黙り込み、自分の部屋で占いを始めました。父は易経占いができ、またそれがとても当たるのです。私は父がこういったのを耳にしました。「ああ、もうあの子には会えなくなってしまう。」<sup>33</sup>

父・鄭鉞にはこの時すでに娘の行く先が見えていたのであろうか。鄭蘋如が出て行ってから一家の空気は重く、暗くなっていたが、そのことを誰も口に出すことなく、平静を装って暮らしていたという。

ここまでが鄭蘋如の自首までに関する静芝の証言である。自首した日付については相違点があるものの、鄭蘋如自身が自首を決めたという点は一致している。静芝が言っている通り、家族に危害が及ぶことを恐れての決断であろう。上海憲兵隊によって拘束された鄭蘋如の身柄はすぐにジェスフィールド76に引き渡された。林秀澄によると身柄の引き渡しは丁黙邨の希望によるものであった。ジェスフィールド76では拘束といっても暴力を受けることもなく、大きな屋敷の中でよい待遇を受けていた。

そんな中、汪兆銘側から鄭鉞にある取引が持ち掛けられた。それは「汪兆銘政府に協力すれば、娘の安全は保障される」というものであった。<sup>34</sup> 当時、鄭鉞は江蘇高等法院第二分院主席検察官であり、抗日テロによって捕らえられた犯罪者を裁く立場にあった。こうした司法関係者は汪兆銘政府にとっては厄介な存在であり、鄭鉞ら要職についている人材を自分たちの都合がいいよう親日側に転向させることは重要事項の一つとされていたのである。では、鄭鉞はこの取引に応じたのであろうか。静芝によると、愛する娘の命がかかったこの取引を父は拒否したという。司法に携わる者として、悪に手を貸すことはできないという思いからの苦渋の決断であった。

<sup>33</sup> 鄭静芝口述・楊瑩整理「鄭蘋如妹妹述説家史(2009)」(天涯2010年第2期) p.69

<sup>34</sup> Chen Lin: "The Real Story Behind Lust, Caution Revealed", China.org.cn 2007年9月14日

1940年2月、鄭蘋如が拘束されてから2か月ほどたったある日、ついに彼女は運命の日を迎える。その日、死刑執行の指揮官を任せられていたジェスフィールド76の林子江は鄭蘋如に「鄭さん、こんな屋敷にいつまでもおってもおもしろくないだろうから、きょうは君をひとつ映画に連れていく、だからその仕度をしろ」と言って連れ出した。彼女は久しぶりの外出に無邪気に喜び、おしゃれをし、化粧もして車に乗り込んだ。しかし、車は一向に映画館につかないどころか郊外に向かい始めたのである。事態に気付いた鄭蘋如は大騒ぎをして泣き叫んだという。刑場についた一行は四角く掘ってある壕の前に鄭蘋如を座らせた、後頭部に拳銃をつきつけた。この時、鄭蘋如は林子江に向かって中国語で何かを抗議していたという。<sup>35</sup> その日、刑場に同行していた林秀澄は鄭蘋如が最期に林子江に向かって何を訴えていたのかが気になり、後日通訳にそのことを聞いたという。その内容は以下のようなものであった。

第一に、私は中国人としてそんなに悪いことをしたでしょうかというのが最期の鄭蘋如の抗議でございますね。それから一つの注文は顔を打たないようにしてくれ、顔を打たないというか傷つけないようにしてくれとかいったそうです。<sup>36</sup>

父の祖国・中国と母の祖国・日本の狭間で時代に翻弄されながらも、両国の和平を願っていた鄭蘋如。中国の為に、とっていた工作員の活動は、政治によって中国への反逆者とみなされるものになっていた。こうして鄭蘋如は「中国人としてそんなに悪いことをしたでしょうか」という問いの答えを得ることなく、26年の生涯を終えたのであった。

---

<sup>35</sup> 東京大学教養学部木戸日記研究会『林秀澄氏談話速記録Ⅲ』（日本近代史料研究会、1977年）p.122

<sup>36</sup> 同注 35 p.123

## 第六章 その後の鄭家

鄭蘋如の死後、残された鄭家の人々はどうなったのであろうか。静芝は鄭蘋如が拘束されている間に姉から何通かの手紙が家族のもとに届いたとしているが、この手紙が本人によって書かれたものかどうかは定かではない。というのも、鄭蘋如の処刑現場に同行した林秀澄が彼女の死後、その死が家族に伝わらないよう偽の手紙を2通ほど書いたと証言しているからである。<sup>37</sup> 木村はなは上海憲兵隊の知り合いの伝手を頼って娘の捜索願を出しており、そのことが林秀澄の耳にも届いていた。鄭蘋如の死を家族に伝えるのは遅い方がよいと判断した林秀澄は「汪兆銘側について広東に派遣されたが病を患い療養している」との旨を書いた偽の手紙を出したのだ。静芝はインタビューの中でこうした手紙の内容には言及していないが、当時彼女が15歳であったことから考えると手紙を受け取った両親が内容を不審に思い子供達には見せていなかった可能性も考えられる。手紙の真偽は不明であるが、静芝の記憶によると姉の死の知らせが家族のもとに届いたのは2月のことであったという。静芝はこのときの家族のようすをこう語っている。

姉が家を出て行ってから2か月ほどたった2月のある日、学校から帰ると父と母が抱き合って泣き、兄が壁にもたれて泣いているのが目に入りました。誰かが、姉がすでに犠牲になったのだと伝えたのです。私は兄に詰め寄り、怒りをぶつけました。あの時、なぜ姉に逃げるよう勧めなかったのか。私はまだ幼いから理解できなかったけれど、兄さんは私より年上でしょう。自首することに賛成すべきではなかったのに、と。今思うと、兄だって苦しい思いをしていただろうに、私はそれに気づかず、悪いことをしてしまいました。あの日のことを思い出すと、心が苦しくなります。<sup>38</sup>

当時、次男の南陽は22歳、末っ子の静芝は15歳であった。美しく聡明で、一家の自慢であった姉・鄭蘋如の死に弟妹がどれほどのショックを受けたかは想像に難くない。悲しみに暮れる鄭家の人々をさらに苦しめたのは鄭蘋如の遺体に関することであった。林秀澄は鄭蘋如の死体は家に帰っただらしいという話を噂で聞いた、としているが静芝によるとそれは事実ではないという。姉の死後、ジェスフィールド76は彼女の遺体を返す見返りに多額の金銭を要求してきた。その頃、鄭家の金庫は日本人によって差し押さえられており、要求された金額はとてつもないものではなかった。そのため一家は鄭蘋如の遺体を引き取れず、今でもどこに安置されているのかわかっていないという。<sup>39</sup>

<sup>37</sup> 東京大学教養学部木戸日記研究会『林秀澄氏談話速記録Ⅲ』（日本近代史料研究会、1977年）p.123

<sup>38</sup> 鄭静芝口述・楊瑩整理「鄭蘋如妹妹述説家史(2009)」(天涯2010年第2期) p.69

<sup>39</sup> 同注38p.70

また、鄭蘋如の親友であった花野吉平も家族同様彼女の死に大きなショックを受けていた。前述したように、花野は鄭蘋如が処刑されたころには上海憲兵隊によって拘束されており、死の知らせを受け取ったのは3月に汪兆銘率いる南京国民政府が樹立し、釈放された後であった。その時のことを、花野は以下のように綴っている。

私の獄中に発生した戦慄すべき事件を聞き、敵は抗日中国にあらざる限りない悪徳を積みかさねる日本の指導階級、権力を握る日奸どもにあり、それとの闘争の決意を固める。軍の組織と権力を私物化し、自己の論功と私欲のためには地獄の谷間に平気で国策の名においてわれわれを陥したのである。この残忍性を發揮できるような権力構造は軍人だけでなく、日本人の人間性を解剖し、精神を正すには革命しかないと強く心に刻む。心理や正義は夜空に輝く星の如く高いところにあるのではなく、肌を合わせた人間社会の手近なところにあるのであり、日本の革命こそ中国の仲間と犬死した同胞に対する弔慰であり、人間として生きているものの義務であると覚悟した。<sup>40</sup>

このように、花野は鄭蘋如たち中国人の友人を死に追いやった日本政府及び軍に非常に強い怒りをあらわにしている。静芝はインタビューの中で「花野は姉に好意を持っていた」<sup>41</sup>と話しているが、それについて花野自身は何も話していない。彼が鄭蘋如に対して友情以上の感情を持っていたかどうかは今となってはわからないが、鄭蘋如は親友の一人であったことに間違いはなく、彼女の死は大きな打撃であったのである。

釈放後すぐの1940年3月、花野は退去命令のもと日本へ帰国するが、鄭家との繋がりは途絶えなかった。1942年、旅行としてふたたび上海の地に降り立った花野は、南陽と再会し囲碁を打ち、共に中国の植物図鑑を眺め、食事を共にしたという。<sup>42</sup> また1945年には香港を皮切りに台北、上海、北京、満州の奉天、新京を一ヶ月ほど旅行しており、上海から奉天まで南陽が同行した。<sup>43</sup> 医師を志していた南陽は奉天医大病院での研修に向かっていたのだ。花野が頻繁に南陽に会っていたのはただ単に友人の一人であるからということに加えて、亡き鄭蘋如の代わりに弟の成長を見守っていたのではないだろうか。ちなみに、南陽は奉天での研修の後、1945年には家族で暮らした万宜坊の家を医院に改装し、27歳の若さで内科と小児科を診る開業医となった。その後も上海で医師として活躍、1980年代にアメリカに移住、2003年に84歳で亡くなっている。

では、そのほかの鄭家の人々のその後はどうなったのであろうか。鄭鉞とはなは娘の死後も上海に留まり、生活していた。1941年太平洋戦争が勃発すると蒋介石率いる重慶国民

<sup>40</sup> 花野吉平『歴史の証言—満州に生きて』（龍溪書舎、1979年）p.48

<sup>41</sup> 鄭静芝口述・楊瑩整理「鄭蘋如妹妹述説家史(2009)」(天涯2010年第2期) p.70

<sup>42</sup> 同注40 p.53

<sup>43</sup> 同上 p.56

政府は連合軍の一員に、汪兆銘率いる南京国民政府は日本の圧力を受け英米に宣戦布告し、中国はさらに混乱状態に陥った。そんな中、鄭家にも新たな試練が訪れる。鄭鉞が癌を患っていることが判明したのだ。鄭鉞は日に日に弱っていき、闘病の末、1943年4月8日、この世を去る。65歳であった。鄭鉞が亡くなった年の暮れ、静芝は母の勧めで戦火を逃れるために重慶へ向かう。当時、日中双方の爆撃が激しく、上海から船で行けるのは湖北省漢口が限界であった。そこから、遊撃隊に同行し、湖南省長沙、広西チワン族自治区桂林、四川省を經由し、1944年1月3日、やっとのことで重慶にたどり着いた。上海を出発してから80日以上が経っていた。そんな静芝を待っていたのは、蒋介石国民党の空軍でパイロットをしていた一番上の兄、海澄が戦死したという知らせであった。兄の同僚は海澄がなかなか重慶に到着しない妹を心配していたこと、そして出撃命令が出たのは4日前であったことを伝えた。静芝はあとすこし早く重慶についていれば兄の姿を見ることができたのにと後悔し、苦しんだという。<sup>44</sup>

1944年11月10日汪兆銘が死去、翌年1945年8月15日に日本政府は連合軍に無条件降伏し第二次世界大戦が終結、翌8月16日には南京国民政府が解散宣言を決定、国民党中央軍への帰順を表明した。同年9月9日、国民党による南京政府関係者及び日本軍部に協力した漢奸狩り開始される。ここで注目すべきなのはたった4年前に鄭蘋如を漢奸として葬り去った丁黙邨自身が今度は漢奸の立場になっているということである。漢奸裁判の場で丁黙邨には死刑が言い渡され、1947年7月、鄭蘋如の運命を狂わせた人物が刑に処された。

1948年、第二次世界大戦後から続いていた中国国内の国共内戦において国民党が劣勢に傾くと、蒋介石は黨員に対して台湾への移住命令を下した。3年前に重慶で軍人の男性と結婚していた静芝は夫や子供と共に移住を決意し、台湾の嘉義市に移住した。遅れること一年、母の木村はなも住み慣れた上海を離れ、台湾への移住を決意する。当時、はなは63歳、日本を離れてすでに33年が経った頃であった。その後、はなは静芝の子育てを支え、穏やかに暮らしていたが1966年1月、前年末に引いた風邪をきっかけに寝込むようになり、80歳で息を引き取った。

母を看取った静芝は2年後の1968年にアメリカへの移住を決意、母の故郷である日本を經由してアメリカカリフォルニア州に渡った。<sup>45</sup> ほどなくして兄、南陽や自身の子供たちも呼び寄せ、鄭一家は混乱の時代を経てアメリカという新天地に根を下ろしたのであった。

---

<sup>44</sup> 鄭静芝口述・楊瑩整理「鄭蘋如妹妹述説家史(2009)」(天涯2010年第2期) p.72

<sup>45</sup> 柳沢隆行著『美貌のスパイ 鄭蘋如—ふたつの祖国に引き裂かれた家族の悲劇』(光人社、2010年) p.396-408

## 第七章 静芝の想い

ここまで激動の時代に生きた鄭蘋如とその家族の人生を述べてきた。そこから見えてきたのは、日本を憎む抗日烈士でもなく、女を武器にハニートラップで男をだます女スパイでもなく、日本と中国の狭間で悩みながらも平和を求めて模索した一人の女性の姿であった。若く美しい国民党の女諜報員と上海の人々が恐れるテロ組織のボスが引き起こした暗殺未遂事件は大いに世間の関心を集めるものであり、また、二人の背後に一体何があったのかと人々の想像を掻き立てるものであったことは否定できない。しかしながら、序論で述べたようにメディアで形成され、大きく膨らみすぎたパブリックイメージが鄭蘋如の真実の姿を隠し、最愛の家族を亡くした鄭家の人々を傷つけ、憤らせたこともまた事実なのである。

2007年、映画「ラスト・コーション」公開された際に、静芝はあまりに過激な映画の内容に驚き、姉の名誉を守ろうとメディアを通して声明を発表した。

(映画「ラスト・コーション」は激しい性描写を含み、またそのために17歳以下鑑賞禁止指定を受けたことで) ジャーナリストたちは鄭蘋如を蠱惑的な高級娼婦であったと書き立てた。更には、彼女が拘束された際にはその美しさに多くの若い男性が魅了され、彼女を連れて駆け落ちしたいと願っていたと書いた者もあり、こうした報道の数々は静芝をいらだたせた。静芝は、「アーティストたちがその想像力を使って現実を捻じ曲げ、誇張することは理解できます」とした。しかしながら、「映画を見た観客がみだらな行為におぼれたヒロインと姉を結びつけることは受け入れがたいのです」と語り、映画「ラスト・コーション」での描写は国の為に命を犠牲にした者への侮辱であるとした。<sup>46</sup>

自らの母国を守るため、平和のために抗日運動へと身を投じた鄭蘋如。彼女の真実の姿を知ることで見えてきたのは、日本と中国が戦争によってもたらした負の歴史であった。「私は中国人としてそんなに悪いことをしたでしょうか」という彼女の問いは、あまりにも重く大きい。そして、それはこれからの時代を生きていく私たちに対する「負の歴史を忘れてはならない」という警鐘なのではないだろうか。

---

<sup>46</sup> Chen Lin: "The Real Story Behind Lust, Caution Revealed", China.org.cn 2007年9月14日

## [参考文献・引用]

### 書籍

- ・柳沢隆行著『美貌のスパイ 鄭蘋如—ふたつの祖国に引き裂かれた家族の悲劇』(光人社、2010年)
- ・高橋信也著『魔都上海に生きた女間諜 鄭蘋如の伝説 1914～1940』(平凡社新書、2011年)
- ・松崎啓次著『上海人文記』(高山書院、1941年)
- ・東京大学教養学部 木戸日記研究会『林秀澄氏談話速記録Ⅲ』(日本近代史料研究会、1977年)
- ・花野吉平著『歴史の証言—満州に生きて』(龍溪書舎、1979年)
- ・犬養健著『揚子江は今も流れている』(文芸春秋新社、1960年)
- ・益井康一著『漢奸裁判史』(みすず書房、1977年)
- ・晴気慶胤著『上海テロ工作 76号』(毎日新聞社、1980年)
- ・NHK “ドキュメント昭和” 取材班編『ドキュメント昭和 2 上海共同租界』(角川書店、1986年)

### 雑誌及びインターネット記事

- ・鄭静芝口述・楊瑩整理『鄭蘋如妹妹述説家史(2009)』(天涯 2010年第2期)
- ・許洪新「真实的鄭蘋如(中)」(檔案春秋 2008年第5期)
- ・Chen Lin “The Real Story Behind Lust, Caution Revealed”、中国网、2007年9月14日、<http://www.china.org.cn/english/entertainment/224552.htm>

### 映像資料

- ・読売テレビ『日中戦争秘話 「ふたつの祖国をもつ女諜報員～鄭蘋如の真実～」』(2008年8月24日放送)
- ・日本テレビ『わたしの中国 第二弾』(2008年7月21日放送)
- ・中国中央電視台『人物 秘密战线中的女性』